



バッハの森通信

第118号
2013年
1月20日発行

財団法人筑波バッハの森文化財団

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9

<http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699

e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 (財)筑波バッハの森文化財団



37年前の批評を発見して確認した バッハの森の成長

新年おめでとうございます。バッハの森は28歳になりました。今年も、皆様から多くの年賀状をいただきましたが、お子さんがいる方々の年賀状には、しばしば家族写真がついていました。10代、20代の若者たちや、子どもや赤ちゃんの写真を見ながら、バッハの森も28年たって大ファミリーに育ったな、と感慨ひとしおでした。私たちは、普段、時がたつのを忘れていますが、子どもの成長に気づくと、時が進んだことを実感するものです。

このような目に見える形とは別に、バッハの森が“一粒の種”から成長したことを改めて思わせる出来事がありました。それは、暮れに紙くずを整理しているときに、一枚の古新聞の切り抜きを見つけたことに始まります。すっかり変色した一片の古紙を捨てようとして開いてみると、それは『カンシュタット新聞』(Cannstatter Zeitung) 1976年2月12日・木曜日の「学芸欄」でした。次にその一部の要約を紹介します。なお、パート・カンシュタットは、南ドイツのシュトゥットガルト近郊の町です。

* * *

東京出身の石田一子のオルガン・コンサートで、パート・カンシュタット・ルーテル教会の今年の教会音楽コンサート・シリーズが始まった。彼女は最近までエルサレムのドイツ教会のオルガニストであった。プログラムは、バロックと現代のフランス音楽(ピエール・デュ・マージとジャン・アラン)を含む、J. S. バッハのコラール編曲と「プレルーディウムとフーガ」口短調という内容豊かなものであった。この日本のオルガニストは、バッハのコラール解釈に対する優れた理解をもって、「18コラール」から2曲、「シュープラー・コラール」から4曲選んだが、そのすべての演奏において、カズコ・インダによって理解され、表情豊かに再現された歌詞の解釈が、重要な役割を果たしていた。それは、ただ、コラール・ファンタ

ジー「おお神の小羊よ、罪なく」の中の「そうでなければ私たちは失望しなければならない」という言葉を思わせるような演奏であった。「シュープラー・コラール」も、その内容に即して“説得的”な演奏であり、レジストレーションでは、しばしば彼女は、ドイツのオルガニストに一般的な音栓よりも基音を用いていた(注: 落ち着いたしっとりした響きになる)。

* * *

このコンサートの翌月、一子と私は、私が筑波大学から招かれたため久しぶりに帰国しましたが、それからバッハの森を建設するまで9年、ユルゲン・アーレントのオルガンが建造されるまでさらに4年、彼女は自由に弾けるまともなオルガンを持ってませんでした。これほど長く、彼女にオルガンなしの生活をさせたことを、今更ながら悪かったと思いますが、どうしてもバッハのコラール編曲を弾くために理想的なオルガンを建てたいという彼女の夢が、バッハの森とアーレント・オルガンになったのです。

今回、すっかり忘れていた37年前の批評を読んで嬉しかったのは、この批評家が、彼女の演奏を誉めているのではなく、彼女が追求してきた音楽を理解し、それに同感してくれたことでした。それはバッハがコラールの歌詞をどのように考えたか、彼の思いと心の理解に努め、それを自分の感性を通して表現する音楽造りです。さらに嬉しかったのは、コラールが人気を失った今のドイツに、こういう批評家がまだいたことです。バロック時代、ルターからバッハまでの200年間、コラールはドイツ民衆の魂の歌でした。民衆の愛唱歌を素材にして、バッハはあの素晴らしい教会カンタータを作曲したのです。

しかし何よりも嬉しかったのは、バッハの森に集まる皆さんが、4年前に亡くなった一子の文化的DNAを継承して、コラールを歌う喜びを楽しむグループとして成長したことが改めて分かったことです。コラール音楽は、日本ではドイツより更に人気がないようですが、流行らないことを気にする必要はありません。何しろ“バッハを感動させた”音楽なのですから。バッハとともにコラールを学ぶ面白さと楽しさを、あなたもバッハの森で味わってごらんになりませんか。(石田友雄)

喜びを分かち合うお祭り

「神の王国」の実現を目指した人の誕生祝い

*これはクリスマス・コンサート（2012年12月16日）で朗読した「メディタツィオ」の改稿です。

クリスマスは、今や日本の国民的行事です。キリスト教文化圏に属さない日本人が、何でこれほど盛んにクリスマスをお祝いするようになったのか不思議です。アメリカ文化の真似とか、コマーシャルイズムが流行らせた、というような辛口の批評を時に耳にしますが、それだけでは説明がつかえません。それほど、クリスマスは日本人の心をとらえました。どうもクリスマスには、キリスト教という特定の宗教を越えて日本人にアピールする、何か“普遍的”な魅力があるようです。

日本のクリスマスは、子どもたちにプレゼントを持って来るサンタクロースが主役になって、プレゼントをもらったり贈ったりして“喜びを分かち合う”お祭りですが、この風習が、本来、クリスマスがイエス・キリストの誕生日のお祝いであることと無関係とは思えません。クリスマスはラテン語やイタリア語では単に「誕生日」と呼びます。勿論イエス・キリストの誕生日のことですが、日本人は誰の赤ちゃんであれ、赤ちゃん誕生の“喜びを分かち合う”お祭りとして、気軽に参加しているのでしょうか。

最も愛唱された歌

これから、イエス・キリスト誕生の喜びを歌う「マニフィカト」を、ドイツ語訳の歌詞とその日本語訳で歌います。「マニフィカト」は、ラテン語で「あがめる」という意味で、「私の魂は主をあがめ」という歌い出しの最初の言葉です。聖霊によってみごもったことを、天使から告げ知らされた処女（マ）マリアが、親類のエリザベートを訪ねたときに歌った歌として、ルカによる福音書が伝える宗教詩です。この歌は、ヨーロッパで、古代、中世、ルネサンス・バロック時代を通じて、人々に最も愛唱された歌でした。もちろん、キリスト教徒である彼らにとっては、マリアがみごもった子どもが、イエス・キリストであったことが

一番大切なことでしたが、それにしても、数ある聖歌の中でこの歌が最も愛唱された理由は何でしょうか。誰もが経験する赤ちゃんの誕生という大きな喜びを、イエス・キリストの誕生の喜びと重ね合わせて、みんなで分かち合う楽しさを、この歌に感じたからではないでしょうか。

「マニフィカト」は3つの区分から構成されています。第1の区分は、みごもったことを知らされたマリアの感謝と喜びの言葉です。これは、赤ちゃんを授かったことを知った女性の感動に通じる思いですから、男性には推測することしかできませんが、勿論、男性もその喜びの分かち合いに参加することはできます。第2の区分は、憐れみ深い神は、弱い者を踏みつけ搾取する支配者たちから富や権力を奪い、弱い者を助け、飢えた者に食べ物を与えてくださると語ります。これは、これからマリアが生む子、すなわちメシアが実現する正義の国、「神の王国」のことです。神の王国では、強い者が富を独り占めするのではなく、皆で“喜びを分かち合う”と言うのです。第3の区分は、アブラハムとその子孫を祝福すると約束した神がイスラエルを憐れみ、助け起こすと語ります。この個所が「マニフィカト」のクライマックスなのですが、ここには“アブラハム”とか“イスラエル”という固有名詞が出てくるので、少々分かりにくくなります。すべての固有名詞には独自の歴史があり、理解するためにはその歴史を知る必要が生じるからです。

「神の王国」の実現

聖書が伝えるところによると、アブラハムは「諸国民の祝福の基（モイ）」になるため、神に選ばれた最初の人です。その後、アブラハムを先祖とするイスラエルの民が、「神の意志を諸国民に伝える」ために選ばれた民族、すなわち“選民”になりました。しかし、更に千数百年の歳月が経つうちに、“選民”イスラエルの後継者になったユダヤ人は、バビロンに捕囚されたり、周辺の諸国民に支配される哀れな民族になりました。アブラハムの子孫に祝福を約束した神は、その約束を忘れてしまったのかと人々が思っていたときに、“選民”イスラエルを助け起こすメシアが、遂にアブラハムの子孫から生まれた、それはイエス・キリストである、と信仰する人々が現れました。初代キリスト教徒です。

諸国民の祝福の基 (トイ)

彼らは、ナザレのイエスの弟子たちでした。他方、ナザレのイエスは、「マニフィカト」の第2区分が語る、憐れみ深い神が支配する正義の国、すなわち「神の王国」、「喜びを皆で分かち合う国」を地上に実現するために命をかけ、命を捨てた人でした。このような、彼の偉大な人格と高貴な行動に魅了された弟子たちは、彼の死後、彼こそはメシア、すなわちキリストであったと信じ、ナザレのイエスをイエス・キリストと呼ぶようになったのです。

考えてみると、アブラハムが与えられた「お前は諸国民の祝福の基 (トイ) になる」という神の約束は、アブラハムの子孫によって、「諸国民が喜びを分かち合うようになる」という意味に他なりません。だから「マニフィカト」は、アブラハムが受けた神の約束が、イエス・キリストによって成就されたと語るのです。

それから2000年たった今も、残念ながら、ナザレのイエスが目指した「神の王国」、即ち「諸国民が喜びを分かち合う世界」は地上に実現していません。しかしながら、彼が誕生したことを祝う喜びを分かち合うお祭りは、世界中に広がりました。今から「マニフィカト」に籠められた、ナザレのイエスに始まった“喜びを分かち合う”喜びを、ご一緒に体験してみましょう。サンタクロースからプレゼントをもらう喜び、赤ちゃんをみごもった喜び、赤ちゃんが誕生した喜び、これらすべての喜びを全部合わせたうえで、本当に「生きる」喜びを体験できるはずですよ。

(石田友雄)

* * *

バッハの森の不思議な魅力

神奈川県相模原から車で2時間、雑多な日常を抜け出して訪れるバッハの森には、「這ってでも行きたい」と思わせる不思議な魅力を感じます。なかなか参加できず、クワイアの皆さんには大変ご迷惑をかけておりますが、今年も仲間に加えていただき、感謝にたえません。今年のクリスマスにも、バッハの森の不思議な魅力が

溢れていました。

12月9日の「子どもクリスマス」で一番心に残ったのは、「耳を澄ます」体験でした。クラヴィコードやチェンバロの微かで繊細な音色の移り変わりにじっと耳を傾けると、日頃テレビや町中で耳にする音と比べ、全く刺激に欠ける音ですが、意識を集中して耳を澄ますと、聴いている自分の耳が敏感になり、音の豊かな世界に気づかされてゆきます。刺激的な音ばかりが蔓延する今の時代に、こうした「耳を澄ます」体験を、多感な子どもたちと共有できたのは、本当に幸せでした。

12月16日の「クリスマス・コンサート」は、「マニフィカト」(マリアの賛歌)を中心に構成されたプログラムでした。「わが魂は主を崇め」で始まる歌詞は、長い間クワイアで何度も唱え親しみ、繰り返し歌ってきたものなので、ほとんど練習に参加できませんでしたが、コンサートのときは辛うじて合唱に参加して歌うことができました。

バッハの森で取り上げる音楽は、大部分、バッハを初めとするバロック時代の宗教音楽です。そこで、歌詞、すなわち「言葉」を学ぶことが重要になります。それは異文化の言葉、つまり私たちのものとは異なった世界観、価値観、歴史観から紡ぎ出された「言葉」です。これらの音楽の美しい響きの下には、私たちのものとは全く違う感性で描かれた世界が広がっています。そういう異文化に出会い、驚き、時に戸惑うことから、バッハの森の活動の本当の面白さが始まります。さらに何度も口に出して「歌詞」を味わい、その本当の意味を考えてみることによって、自分なりに「分かる」地点に到達します。その時、歌う楽曲が表面的な「いい音楽」に終わらない、心の琴線に触れる音楽となって迫ってくるのです。バッハの森に「這ってでも行きたい」と思われるのは、実にこの時です。

バッハの森には、ただ聴くだけではなく、参加し続けることで、初めて味わえるバッハの世界があります。今回のクリスマス・コンサートでは、友雄先生の「メディタツィオ」を通して、これまで何度も唱え、歌ってきた「マリアの賛歌」がまた新しく自分の心に響いてきました。それは何度でも繰り返し味わえる世界です。この豊かさこそがバッハの森の「不思議な魅力」ではないでしょうか。

(安積源也)

- 10.18, 25 運営委員会 参加者5名、4名。
 10.20 来訪 木村理恵氏(ヴァイオリニスト)、ロバート・スミス氏(ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者)。
 11. 1, 8, 15, 22, 29 運営委員会 参加者6名、4名、4名、3名、4名。
 12. 6, 13, 20 運営委員会 各参加者4名。
 12. 6 クリスマス飾り付け 参加者7名。
 12. 8 クリスマス祝会 参加者18名(大人)、6名(子ども)、計24名。
 12. 9 子どもクリスマス 参加者41名(大人)、5名(子ども)、6名(幼児)、計52名
 12.16 クリスマス・コンサート 参加者62名。
 12.21～2013.1.9 冬期休館
 12.27 見学 伊藤夕歩氏(株・サンビーム)、他3名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究
 コラールとカンタータ (JSB)

- 10.20 第344回、三位一体後第10主日のためのカンタータ「私たちより取り去ってください、主よ、誠なる神よ」(BWV 101);コラール「取り除きたまえ」。オルガン: J. S. バッハ「天の王国にいます私たちの父よ」(BWV 636)、當眞容子。参加者13名。
 10.27 三位一体後第13主日のためのカンタータ「あなたにのみ、主イエス・キリストよ」(BWV 33);コラール「主にのみ、主イエスよ」。オルガン: J. S. バッハ「栄光がいと高いみ座にいます神にあるように」(BWV 33/6)、笠間きよ子。参加者12名。
 11.10 第345回、オルガン: J. パッヘルベル「主にのみ、主イエスよ」、笠間きよ子。参加者14名。
 11.17 三位一体後第19主日のためのカンタータ「どこへ私は逃げて行くべきか」(BWV 5);コラール「いざこへわれ逃がるべきや」。オルガン: J. S. バッハ「私の心と思いを導いてください」(BWV 5/7)、金谷尚美。参加12名。
 11.24 第346回、オルガン: J. S. バッハ「どこへ私は逃げて行くべきか」(BWV 646)、金谷尚美。参加者13名。
 12. 1 第347回、アドヴェント第1主日のためのカンタータ「お前たち、喜んで高く舞い上りなさい」(BWV 36);コラール「いざ、喜びたりませ」。オルガン: D. ブクステフーデ「さあ来てください、異邦人の救い主よ」(BuxW 211)、安西文子。参加者14名。

学習コース

- バッハの森・クワイア(混声合唱) 10. 20/10名、10. 27/11名、11. 10/12名、11. 17/13名、11. 24/13名、12. 1/13名、12. 8/16名、12. 9/20名、12. 15/18名。
 バッハの森・ハンドベル・クワイア 10. 20/6名、10. 27/5名、11. 10/5名、11. 17/6名、11. 24/8名、12. 1/7名、12. 15/7名。
 バッハの森・ハンドベル・リンガーズ 10. 25/3名、11. 1/3名、11. 8/3名、11. 15/3名、11. 22/3名、11. 29/3名、12. 6/3名。
 コラール研究会 10. 26/6名、11. 9/6名、11. 30/5名。
 オルガン音楽研究会 10. 26/4名、11. 9/7名、11. 30/6名。
 クラヴィコード・オルガン教室 10. 26/4名、11. 9/3名、11. 30/3名。
 オルガン・クラブ 10. 19/3名、11. 2/3名、11. 16/3名。
 入門講座: 聖書を読む 10. 20/4名、10. 27/5名、11. 10/4名、11. 17/5名、11. 24/4名、12. 1/5名。
 レチタティーヴォを歌う 10. 20/4名、10. 27/5名、11. 17/5名、11. 24/4名、12. 1/5名。
 オルガン、クラヴィコード練習 10. 16/2名、10. 17/1名、10. 18/2名、10. 19/2名、10. 20/1名、10. 23/2名、10. 24/2名、10. 25/3名、10. 27/2名、10. 30/3名、10. 31/2名、11. 1/2名、11. 6/2名、11. 7/1名、11. 8/3名、11. 10/1名、11. 13/1名、11. 14/2名、11. 15/4名、11. 16/2名、11. 17/1名、11. 20/3名、11. 21/2名、11. 22/2名、11. 24/1名、11. 27/3名、11. 28/2名、11. 29/2名、11. 30/1名、12. 1/1名、12. 4/3名、12. 5/1名、12. 6/2名、12. 7/1名、12. 11/2名、12. 12/4名、12. 13/2名、12. 14/1名、12. 15/1名、12. 18/3名、12. 19/2名、12. 20/3名、12. 21/1名。